

岡崎良介のつぶやき (2015年2月10日)

最近の私の自慢は、西加奈子という女流作家が書いた“サラバ!”(上・下:小学館)という小説の、初版第一刷を持っていることです。購入したのは去年の11月頃、新幹線に乗る前に、何か小説を読みたいな、とふと立ち寄った八重洲の本屋で目に留まったのがこれで、その表紙の絵(西加奈子さん自身によるもの)とオビに書かれていた、“1977年5月、坏歩(あくつあゆむ)は、イランで生まれた”という、日本の小説にしては風変わりな設定(大体、日本の小説はせせこましいものが多くて好きではない)であることに魅かれたからでした。

内容についてはネタバレになってしまうのでここでは避けておきますが、いきなり新幹線の中で声を出して笑ってしまったり、作らなければいけない資料があるのにそれを差し置いて毎晩夜遅くまで読んだり、と久しぶりに熱中してしまいました。ちなみに一つだけ小説の中身を言っておくと、主題のひとつは相場の世界にも通じる重要なメッセージです。

その後、この本は直木賞を受賞し、今では25万部を超える大ベストセラーになっているのですが、受賞の前に価値を見出したことが、まるで大化け銘柄を見つけたようで妙に嬉しい。しかし、こういう体験は昔から私にはよくあって、この曲は売れるな、とかこの映画はアカデミー賞を取るな、とか物心ついた時からそんなことを直感するところがあって、ひょっとするとそうした“兆し”を見つけるのが好きな少年が、そのまま大きくなって今ではそれを生業にしてしまったような気がします。